聖騎士達がゆく。

光虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖騎士達がゆく。

【Ｎコード】
Ｎ８３４５Ｅ

【作者名】
光虎

【あらすじ】
ファイバー王国から派遣された四人。この四人はいったいどのような国や村を旅してゆくのか・・・。

ep1　始まりの村

四方八方に広がる荒れ果てた荒野。生い茂る草木もなければ人も居ない。
だがしかし、その荒野で一台の車が走っていた。
「おい、次の村はどこだ？」
その車の運転手が乗車しているほかの人間三人に行き先を聞いている。
「えーっと次は確かぁ・・・メシンレベルドです」
その中の少年が行き先を指定している。
「メシンレベルド？聞いたこともねえな」
運転手はその場所はどういうところなのかという意も含めてそう問う。
「メシンレベルドは農業がさかんな豊かな村だよ。経済的には豊かだとは言えないらしいけど。」
と、乗車している中でも一番小柄な少女が答える。
「ふぅん。久し振りにゆっくりできそうなところね」
最後に最初の少年と同じくらいの少女が言う。
「でも農業がさかんなせいか盗賊の出没も絶えないらしいよ」
「んじゃ決まりだな。とりあえず王国の方に許可を貰って任務を果たしちまおう」
「そうですね」
「そうね」
「そうしようか」
「よし、ちょっとスピード上げるぞー。振り落とされんなよー」
運転手はアクセルを踏み、車の速度を上げる。

車は無事メシンレベルドに到着した。そして運転手が村の外れに車を停めておく。
「とりあえずだ。適当に散策してこの村の様子でも把握しとくか」
運転手だった男が皆に促すようにする。
皆が賛成の意を唱えると村の方から村人がくる。
「お越しくださってありがとうございます。旅人殿・・・ですか？」
「ええ、俺達は旅人です」
「オレがこいつらのリーダー兼保護者だ」
「何が保護者よ！」
「・・・とりあえず村長様のところへ案内してもらいたいよ」
小柄な少女が村人にそう言う。
「はい、構わないですよ。こちらへご同行お願いします」
承諾した村人は旅人４名を村長の家へと向かっていった。

しばらく歩いてゆくと、村長の家に着いた。
「村長、旅人が起こしになられました。ご挨拶したいとのことですが」
「おー、旅人殿か。旅人様、ご歓迎いたしますよ。入ってきてください」
村長が旅人４名を入らせるように村人に指示する。
「村長はあなた達を歓迎するとのことです。入ってもいいですよ」
「えっとでは・・・失礼します」
少年がまず一番に扉を開ける。
続々と他の旅人も家の中に入ってくる。
部屋の中は極シンプル。しかし、どことなく穏やかそうな気持ちをそそられる部屋であった。
「お越しに頂き光栄に思います。たいした歓迎はできないと思いますが・・・どうぞゆっくりしていってください」

「ありがとうございます」
「そうさせてもらう」
「どうもっ♪」
「言葉に甘えるとするよ」
「ところでお名前はなんというのですか・・・？」
村長が旅人達の名前を聞く。
「はい、俺はシエル＝エドワードです」
少年が最初に名乗る。
「オレはリーク＝リベリオン」
その次に運転手だった男。
「あたしはエルナ＝アルファードよ」
次に少年と同じくらいの背丈の少女。
「ボクはレイン＝リライト」
最後に一番小柄な少女が名乗る。
「分かりました。どうぞ、この村をお楽しみください」
「そうします。では」
シエル達は村長の家を出て、案内人についてゆく。
村の大通りに出たところでレインが案内人に言う。
「まずは宿を確保したいよ、案内してほしいな」
「レインっ、人に頼むときはもっと礼儀正しくしないと駄目だよ」
シエルがレインに注意する。
そんなやり取りを見ていて、案内人はクスリと笑う。
「あはは、いいですよ。宿ですね、えっと確か・・・こちらのほうです」
案内人がその名の通りシエル達を案内してゆく。
案内されているとき、案内人に聞こえないようにリークが三人に呟く。
「今回も村人達には気づかれないように。宿屋についたら早速ミーティングだ」
シエル達は静かに頷く。

――しばらく歩いてゆくと、案内人が立ち止まる。
「ここが宿です。旅人様がご要望であれば無料にいたしますが・・・・」
「そ、そんな！払わないわけにはいけませんよ！」
「左様でございますか」
「ちょっとシエルッ！せっかく得できるところじゃない～」
エルナがシエルに不満そうな声を漏らす。
「そんな失礼なこと出来ないよ。さ、宿に行こう」
「絶対しアンタいい男にはなれないわ・・・」
そこまでエルナが言うと、シエルはエルナの頭をポカッと叩く。

案内人が宿の中にシエル達を入らせる。宿のフロント（にあたる場所）は質素な場所であった。
「では、自分はこれで失礼します。くつろいでいってくださいませ」
「今までありがとうございました。また必要な時は勝手ですけど呼ばせてもらいます」
「勝手だなんてとんでもない！これが仕事ですから」
「あはは、仕事熱心なんですね。では俺達はチェックインを済ませてきますので」
「分かりました、では」
案内人が手を振ると、シエルも元気よく手を振っている。
「シエル、早めにチェックインをすませるぞ。さっきのことは覚えてるだろ」
「はいっ！」
「声がでかい」
「はい・・・」
そしてリークはチェックインを済ませた。

シエル達の部屋番号は０５、部屋数が少ないため二桁で表されて

いる。
「ここがあたし達の部屋ね。うん、中々いいところじゃないっ」
エルナが部屋を賞賛する声を出す。
い草とはまた一つ違った植物で作られた畳が部屋中に広がっている。
部屋の真ん中に少し大きめの丸く低い机が置かれているだけのシンプルな部屋だが、十分にくつろげる部屋である。
「このままこの宿に住み込みたいよ」
レインも同じようにこの部屋に満足しているようだ。
「オレもできるならそうしたい。じゃ、ミーティングを始めるか」
「「「は～い」」」

黙々とミーティングを続ける四人。
「やっぱり盗賊の被害はあっている様だな・・・歩いてる時に村をぐるりと見回してみてそんな雰囲気はあった」
「でも居場所がわかりませんよね」
「そうだ、こうなったら村の入り口で盗賊を待ち構えるしかない」
「でも頻繁に現れるとは限らないよ？」
「いんや、村長の部屋も見ただろ？いくら経済的には貧しいとはいえ、農業がさかんなこの村では村長も待遇されるはず。しかも畑を見てみたが野菜も何もなかったもんじゃねえ」
「んじゃ頻繁に盗みに入ってきてるって言うの？」
「そうだ」
「では入り口を交代で見張りましょうか」
「いや、俺達全員で見張るんだ」
「なんでよー？」

「村一つをここまで貧しくする盗賊だ、それなりの数はあるに違いない」
「でもあたしたちならそれくらい・・・」
「無理だ、いくら俺達でも１０人くらいに奇襲されたらたまったもんじゃない」
「では四人で見張りをするんですね、時間は？」
「なるべく早めがいいが・・・夕食を終えてからにしよう」
「分かりました」
　そこまで話していると、扉からコンコン、とノックをする音が聞こえた。
「あ、入っていいですよ」
「失礼いたします」
　入ってきたのは宿の営業者のようだ。
「もうそろそろお夕食が出来ます、食堂にいらしてください」
「ご報告ありがとうございます」
「いえいえ、それでは・・・」
　営業者はいそいそと部屋を出て行く。
「飯か。ようしお前ら、食堂に行くぞ」
「「「お～！」」」

　食堂に集まった四人。既に夕食は用意されており、結構な数の営業者達は笑顔である。
「メシンレベルドにお越し頂き誠に有り難く存じます。ここでは最高級のディナーをご用意しております、お口に合うかは判りかねますがどうぞ召し上がってください」
　見ると豚の丸焼き、七面鳥、その他諸々・・・とにかく豪華な食事が用意されていた。
「うォっ！旨そうじゃねぇかー・・・」

リークがよだれを垂らしながら言う。
「久し振りの豪華な夕食だね、心が躍るよ」
レインもまた、この食事を有意義に楽しもうと思っている。
「ありがとうございます、では、どうぞごゆっくり・・・」
営業者達はすぐさま食堂を出て行く。
「おー分かってるじゃねーか、やっぱり飯のときは少数で食べるのがいいよなァ・・・」
またよだれを垂らしつつ言うリーク。
「それじゃっ！頂きますと！」
エルナが既にスプーンを持ち、スープを掬い上げようとした。
が、その時

「ちょっと待ってください！」

シエルがリーク達にも聞こえるように少しだけ声を張り上げて言う。
エルナもその声に気づき、口に持っていこうとしたスプーンを空中で止める。
「な、何よシエル。こんな豪華な夕食は口を通らないって言うの？」
エルナが不満そうにそう言う。
「いや・・・違うんだ・・・、とりあえず一旦外に出よう」
シエルが何かを考え込んでるような顔でそう言う。
促されたリーク達は渋々食堂を出て行き、正門から外へ出る。

「で、何で外へ出したんだよシエル。オレ達はもう腹の虫が幼い頃から親に勘当されちまってピーピー鳴いてるんだぜ？」
「匂うんです・・・」

「匂うぅ？」
シエルは少し声のトーンを下げる。
「まず一つ疑問に思ったのはあの部屋、いくら来客を出迎えする部屋だといっても村長の部屋よりも快適なのは疑わしいんです」
「それはあの宿が単に旅人達を盛大に出迎えしたいからじゃないの？」
エルナは疑問そうに問いかける。
「それにしては度が過ぎるよ」
「どこがよ？部屋くらいなら・・・・・・」
「部屋くらいなら、ね」
「どういうことよ？・・・・・・あっ」
エルナもシエルの言いたいことが分かったようである。
「なるほどね、ボクもようやく気がついたよ」
レインも同じように気づく。
「そう・・・あの夕食を見たでしょう？とても盗賊に食品を強奪されてできる料理ではありません」
「そういやそうだな・・・」
「しかも食堂には俺達以外の客もいません、それでもあの豪華な食事、多数の営業者が働いているんです。とても貧しいとは思えません」
「えーっと・・・つまり何だ、この宿の営業者達はァ・・・」
リークは口は笑っていても顔に汗を垂らしている。
シエルもそれに釣られてクスリと笑う。
「ええ、そうですよ・・・あの人達は」

ｅｐ１　始まりの村（後書き）

始めましての方、始めまして。
お久し振りの方、お久し振りです。光虎と申します。
この小説はファンタジーの部類に入ります、多分。
ｅｐ１ではあまり言うことはありませんが・・・、とりあえず挨拶程度でお願いします。
作者は他に『パニック・バトラー』という小説を連載していますので、良ければそちらの方もご閲覧ください。
では、また次のお話で・・・。

ep1－2　セインアフター

「あの人たちが、この村の盗賊事件の犯人ってことですね」
シエルは顔は笑顔のまま、そう答えた。
「多分、旅人達からもせしめていたんでしょう。当然、俺達も標的になってたんです。あの食事は睡眠薬かなんかを仕込ませているんでしょう」
「……ふゅー」
リークはシエルと、事実に対する驚きに鳴らない口笛を吹いた。
「今日はなんだか冴えてるねシエル。いつもならボクが先に言うはずだったのに」
「てんめっ！気づいてたのかよ！」
「さぁね、今回はシエルが冴えてたってことだよ」
レインとリークが争っている中、エルナはシエルに問いただす。
「で、どうするのよ？」
「う～ん、そうだなぁ・・・」
シエルは親指と人差し指の間であごを支えながら考え込む。
だが、宿のほうから出てくる人だかりに気づき、その仕草を中断した。
「どうしたんですか、こんな所で。俺達に用事でもあるんですか？」
宿から出てきた人だかり・・・宿の営業者達にシエルは笑顔で問う。
営業者の一人は憤怒の表情をしながら
「さっきの話は聞かせてもらった。生きて帰しはしねえぞ」
「あ、聞こえてたんですか。これはすみませんでした」
シエルは微笑しながら頭を下げた。
「それにしても、ベッタベタな台詞だね。決まり文句とも言うのかな」
「そうね、もうちょっと捻った台詞はないのかしら？」

「ならこれとかいいんじゃないのか、“帰ることができないような身体にしてやる”とか」
「リークさん、それあまり変わりませんよ」
レイン達が全く関係のない話をしていると、さっきの営業者が
「なにごちゃごちゃ言ってんだ！　お前ら、かかれェ！」
そんなことを叫びつつ、部下と見られる営業者達にシエル達を襲うように指示する。
「またベッタベタだね、改善の余地なしといったところかな」
「ところでお前ら武器持ってきてるか？」
襲ってくる中、リークは余裕の表情でほかの皆に武器の有無を確かめる。
そして敵が襲ってきても、その攻撃を避けながら会話を続ける。
「残念ですが、部屋に置いたままです」
「奇遇だね、ボクもだよ」
「あっははーあたしも」
「なんだお前らもか、ちょうど俺も忘れてきたところだ」
「じゃ、あそこの木の棒で代用しましょう」
シエルが木の棒の束を指しながら言う。
「んだな。お前ら、もう自由にやっていいぞ」
「「「オールライト」」」
リークが指示を出すと、シエル達は木の棒の束の方向へと向かっていく。
…もちろん、襲ってくる敵の攻撃を避けながら。
「いっちばん乗りぃ！」
エルナが真っ先に木の棒を手に入れた。その後、シエル、レイン、リークと続いて木の棒を手に入れる。
「やっぱり早いなぁエルナは。今度コツでも伝授してもらおうか」
「へへへん、これにコツなんてないわよ」
「酷いなあ」
やはり、この時も相手の攻撃を避けながら会話をしている。

そしてエルナは両手で木の棒を持ち、臨戦体勢に入っていた。すでにリークとレインは敵と剣を交えている。
シエルも早々と木の棒を構え、敵と剣を交える。

「そこのちっちゃいお嬢ちゃん、その身体に傷をつけたくなかったら離れてたほうがいいよ」
敵の男が、ニヤニヤしながらレインに話しかけていた。
「うん、そうだね。ボクは傷をつけたくはないよ」
そう言った後、レインはため息をつきながら
「じゃ、傷つかないように戦えばいいんでしょ？」
「へ」
疑問符を浮かべる間もなく、その男は地面に倒れこんでいた。
「あ、ごめん。君に傷をつけちゃったよ、精神的と身体的、両方にね」

一方その頃、リークは三人の男に囲まれていた。
「おいおい。オレはいつからむさ苦しい男組にリンチされるようになったんだ？　せめて可愛い女の子にしてくれよ、というかそれを願いたいぜ」
「るっせぇ！こっちは自分達の生活かかってんだよ！てめぇらみたいな気楽な旅人とはわけが違う！」
男の一人が激しく激怒しながら叫ぶ。
「気楽・・・ねぇ」
リークはクスリと微笑する。
「何笑ってやがる！ここで死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッ！！」
男達は木の棒の先に包丁をくくり付けたもので、リークを襲おうとした。
だが、一歩踏み出すその前に男達は
・・・うつ伏せの状態で倒れた。
「こちとら、そんなヤワなもんでやってんじゃねぇんだよ。出直し

てきやがれ」

エルナは、一人の長身な男と対峙していた。
「すまねぇな、俺は家内の生活を守る義務がある。いた仕方のないことだ」
「そっか。でもあたし達もここの村人を守らないといけないの」
男とエルナは武器を構えたまま、話していた。
「だがそれはただの自発性に従っただけだ、義務もへちまもないだろう。しかも、その齢で」
男は落ち着いた口調でエルナに話している。
それに対してエルナは、顔を笑顔にさせながらそれに答える。
「ふふっ、ならあたし達がなんで助けようとするか、教えてあげよっか？」
「断、ッる！」
男は間髪入れずに、エルナを攻撃しようとしていた。
だがエルナは余裕といった表情で、それを避け、男の後ろに回りこむ。
エルナは、手刀で男の首を叩き気絶させた。
「じゃ、教えてあげない♪　・・・大丈夫。家族のほうは、心配しないで」

残った一人、シエルの方は二人の男を相手にしていた。
「俺、こういった武器を使うのは慣れていないんですよ。困りましたねぇ…」
シエルは木の棒を弄びながら二人に言った。
「そんなこと言っても俺達ぁ変わんねぇぞ！」
「そうだぜぇ！？謝るなら今の内。だったら許してやらんこともねぇぞぅ？」
二人の男は、笑いながらそう言った。
するとシエルもそれに釣られて、少し声を出して笑っていた。

「…何が可笑しい」
「いや、もっともだなぁって思ったんですよ。確かにそう言われても変わりませんよね」
「ふん、だったら早く金出して負けを宣言しやがれ！」
「あははっ、そう言われましても」
言葉の続きを言う前に、シエルは二人の後ろに回りこみ、木の棒で一閃した。
「こっちもそう言われましても、容赦もなにも変わらねぇ・・・ですよ」

「お、お前らなぁにモタモタしていやがる！？たった四人だろう！」
頭と思われる男が部下達に渇を入れる。
だが部下達はその声を聞くこともできず、ただただシエル達に翻弄されていた。
「そういえばシエルは剣技演習でいつもボクに負けてたね、勝ったことってあったかな」
レインが男達と剣を交えながらシエルに話しかける。
「お、俺でもレインに勝ったことはあるよ！　レインが強すぎるんだよ・・・」
「そうかな、ボクはリークに時々負けてたよ」
「あー、そうだったな。時々オレ勝ってたわ。でもエルナには五分五分ってところだったか」
「そうね、大体半分半分くらいだったわ。でもあたしシエルによく負けてた」
シエル達は男達と戦いながら、余裕で話し掛け合っていた。
「いつもの武器があればもっと楽に倒せていたのかもしれませんねッと！」

シエルが敵を叩きながらリークに言う。
「いっつも持ち歩くのも物騒極まりねぇってあのクソ皇帝陛下からの命令だろう・・・っと！」
「リークさん、皇帝陛下には礼儀正しくしましょうよ」
「あいつが別にいいつったからいいんだよ、つーかあっちから絡んで来たんだ・・・しッ！」
リークも同じように叩きながら話し合っている。
「でも皇帝陛下からはナンパをしてもいいって言ってなかったよ」
レインがリークに皮肉をこめて言う。
「うっせーなァ、別にやるなともいってねぇだろうが！」
「今度王国に帰ったときに検討しとくよ」
「…すみませんでした」

「ふぅ。大体片付いたわね」
エルナが汗を拭き取りながらそう言う。
「いやまだだよ。まだ頭を残してる」
シエルが冷静に状況を把握し、エルナに伝えた。
「うし、んじゃ最後の一人やっつけたら王国に報告して、報酬の取り分を聞いとこうぜ」
「賛成だね。多分あいつは宿の中じゃないかな。逃げてたのが見えたよ」
レインが宿の方を指差す。シエル達もそれに頷いた。
「って宿の中のどこにいんだよ、迷ってたら逃げられちまうぜ？」
「あはは、解ってますよあいつが居る場所は。汚い人間の考えが解るのは不愉快ですけど」
シエルが苦笑しながら、宿の中に入っていく。

「はい、見ーつけた。観念してリザインしなよ、そうすれば村人に

突き出すのはやめてあげる」
レインが頭に棒を突きつけながら、頭にそう言う。
部屋はシエル達が居た部屋。頭はシエル達のものを盗んで逃げようと考えていたのだ。
「盗賊の精神は判りませんね、いや…流石は盗賊といったところでしょうか」
シエルはいつになく真面目な顔で頭を睨んでいた。
「ふんッ！これがあったらお前らなんて怖くもなんともねぇ！」
頭はそう言うと、シエル達の荷物から何かを取り出した。
…銃である。
「なんでてめぇらがこんなに強ぇのかはわかんねぇが、これの前にはどうにでもできねぇだろ！ハハハ！」
頭はすでに勝ちを見据えているかのように高らかに笑った。
しかしそんな頭を見ていて、レインは溜め息をついた。
「あーあ…一番駄目な物に手を出しちゃったね。もうボクは知らないよ」
レインがわざとらしくプイと頭の反対側を向いた。頭は「へ？」というような顔になっている。
…その頭に、シエルがゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと歩み寄ってゆく。
「それを、返せ」
いつもの穏やかな顔から一変し、怒りをあらわにしている顔で頭にそう言う。
その声は迫力、圧力が頭の心を揺るがしていた。だがしかし、頭は汗を垂らしつつも
「な、何マジになってやがる！う、撃つぞ！」
頭は手をわなわなと震わせながら、銃口をシエルに向ける。
しかしその銃口を向けられても、シエルは全く動揺しなかった。
痺れを切らした頭は指を銃に掛け、銃を構えた。
「う、撃つぞオォォォォォォォォォォォォ！」

意を決した頭は引き金を引こうとする。
…が、しかし
「ほいっと！」
エルナがすぐさま頭の方に走り込み、頭の手を蹴って銃から手を離させた。
「シエル、今よ！銃を取って！」
シエルは言われるがままに銃を取った。そしてその銃口をさっきまで持っていた頭に向ける。
なんと皮肉なことだろうか、自分が主導権を握っていたはずの銃を、取り返されてほぼ同じような仕草で銃口を向けられているのだ。
「チェックメイトだね」
レインが冷静に、そして静かにそう言った。
「クソッ！なんなんだよてめぇら！しかも武器にはその銃にナイフに刀に・・・そして鎌まであった！いったいなんなんだよ！」
そこまで言った頭は、ハッとしたような顔でシエル達が何かということに気がついた。
「ま、まさか…お前ら…」
頭はわなわなと人差し指を震わせ、シエル達に指す。
「ふぁ、ファイバー王国皇帝直属聖七星騎士団第二星団特別班、……」
頭は、口も腕も足も震わせながら、おどおどとしながらその言葉を発する。

「特別班、『セインアフター』！？」
「じゃ、じゃあそこのお前は『死神の策士リーク』『閃きの魔術剣士レイン』『神速の竜巻エルナ』『精巧の銃士シエル』！？」

「なんだ、知ってるんですか」

シエルは笑顔に戻った顔で頭に問いかける。
「し、知ってるぞ！各地を飛び回り盗賊を討ったりする・・・」
そこまで言ったところで、頭は気力を失くした。
「そうそう、それだ。にしても『セインアフター』なんてだっせぇネーミング誰が付けたんだよ」
「皇帝陛下ですよリークさん」
「…このことは内緒な」
「す、すまなかった！あ、謝る！俺達の負けだ！だ、だから村人達に突き出すのはたやめてくれ！」
頭が額を地面に擦り付けながら、そう謝罪している。
「あ、そういえばそういう約束だったね。大丈夫、ボクは約束を守る主義だよ」
そう言うとレインは頭に歩み寄る。
そして少し笑みを見せながら頭に言う。
「うん、突き出すのはやめてあげる。でもね？道のど真ん中で倒れている宿の人達、そして後からボク達が見つけて道のど真ん中に置く予定の作物や金。これを見たら村人達はどう思うかな？」
レインは笑みを残しつつも、皮肉を混ぜた声で言う。そんなレインを見てリークは同情の声で
「あーあ、ひっでェなァ…。当然のことなんだろうけど」
「リーク～、後で覚えていてね」
「…お、オレの第二の人格が…」
「…はいはい」
レインは溜め息をつくと、シエルに先を促せた。
シエルはレインの心情を察し、銃口を頭に向け直した。
「い、いやだ！や、やめてくれ！お願いだぁぁ！嫌嫌嫌嫌嫌だ！死にたくねェ！死にたくねェ！うわぁぁぁぁあっぁぁぁあ！！」
頭は両手をかざして、生き永らえようと必死に抵抗する。
「ジ・エンド、終了だね」
「シエルを怒らせたからいけないのよね」

そして…シエルは引き金を引いた。

「もしもし？　あぁそうだ、取り分は幾らくらいだ？　…あぁ分かった、ありがとよ」

リークは携帯型の電話で、王国と連絡を取り、報酬の取り分を聞いていた。

用件が終わって電話を切ったところで、シエル達にそれを報告した。

シエル達は予定通りに報告された分の金額を、盗賊達が奪っていたものから差っ引いた。

その量の少なさにエルナは不満を漏らしたが、シエルに「最小限に抑えろとの命令だから」と咎められてその口を閉じた。

そして余ったものを別の大きな袋四つに分け、全員に持たせた。

全てを取り戻したところで、シエル達は荷物を確認し、別の部屋へと移っていった。そこで夜を過ごすことにした。

…翌日

「では、ありがとうございました」

シエルが村長に頭を下げ、今までこの村でお世話になったという感謝をこめて礼をした。

同じように昨日案内してくれた村人にも頭を下げる。

「もう帰ってしまわれるのですか・・・。名残惜しいですが、あなた達がそういうならお見送り致します」

「どうしても用があるので。では…。あ、後で宿屋の前に行ってみてください、面白いものが見れますよ」

シエルはもう一度頭を下げて、皆と一緒に村長の家を出て行った。

出て行ったのを見届けると、村長は手を合掌して

「彼らの旅に幸あらんことを・・・」

リークは荷物を車に詰め込み、皆を車の座席に座らせてエンジンをかけた。
「んー…昨日の疲れがまだ残ってやがる…」
リークが片手で運転をし、もう一方の手で体を伸ばす。
「リークさん、ちゃんと運転してくださいよ。危ないですから」
シエルがリークに注意する。
「あーでもよォ…この暑さになればやる気も失せるっつーの…」
渋々とハンドルを持ち直しながら言った。
するとレインは小さな声で何かを唱えていた。
「あーーー！魔術は駄目ぇーー！」
レインがやろうとしていることを察したシエルはその行動を止める。
「ライオット・ウォータ［暴動の雨］くらいやれば疲れも吹っ飛ぶかなと思ったんだけど」
「いや疲れは嫌でも吹っ飛ぶだろうけど！」
「あんた達うっさい！もっと静かにしなさいよ！」
「だぁぁ！てめぇら黙ってろ！」

「それにしても、何で殺さなかったの？」
落ち着いたところでエルナがシエルに問いかける。シエルはそれに笑顔で答えた。
「あの人はまだFランクだよ、規定で殺人は認められてないよ」
「はぁ…甘いのねシエルは」
「あはは、ごめん」
そして車は進んでゆく…

ep1－2　セインアフター（後書き）

お久しぶりです。光虎です。
ここまででどうでしたか、つまらないと思った方もいらっしゃるでしょうが僅かな希望の光を俺は信じています。
世界観などはまだ分かり辛いでしょうから、そのことについては次回記させていただきます。

では、また次回…（手抜きあとがきですみません）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8345e/

聖騎士達がゆく。

2010年10月10日02時05分発行